

水星交響楽団

チェンバーシリーズ

第3回演奏会

Mercury Symphony Orchestra
"Chamber-Series"
the 3rd Concert



指揮 齊藤 栄一
ヴィオラ独奏 山本 一輝



2021年1月31日(日)

開演 14:00 (開場 13:00)

小金井 宮地楽器ホール 大ホール



水星交響楽団 チェンバーシリーズ 第3回演奏会



曲 目



フランシス・プーランク
フランス組曲 (約12分)



パウル・ヒンデミット
ヴィオラ協奏曲「白鳥を焼く男」(約25分)
ヴィオラ独奏：山本 一輝

セルゲイ・プロコフィエフ
交響曲第1番「古典交響曲」(約15分)

～ 休 憩 (約20分) ～

芥川 也寸志
弦楽のための三楽章 (約13分)

パウル・ヒンデミット
ピアノ、金管と2台のハープのための協奏音楽
(約20分)



エイトル・ヴィラ＝ロボス
ブラジル風バツハ第2番 (約18分)

ごあいさつ

本日はお忙しいところ、私ども水星交響楽団（略称：水響）の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

2019年11月に、満員のすみだトリフォニーホールで、マーラーの交響曲第8番を演奏してから、2020年5月の演奏会に向け3月初旬まで練習を行ってききましたが、ご存じのとおり、社会情勢が大きく変わったことでその後の練習は中止、演奏会もやむなく延期となってしまいました。

その後、時間が経っても状況はあまり改善せず、2020年11月に予定していた演奏会も、そのままの形では開催が難しいことが次第に明らかになってきたとき、私たちが出した結論が、水響としては2003年以来となる「チェンバーシリーズ」の復活開催でした。

フル編成では難しくても、小さい編成による素晴らしい曲はたくさんあります。まさにこの状況だからこそ選ばれるべくして選ばれた、それが今回の6曲によるプログラムです。大変に盛りだくさんな内容ですが、それぞれ独自の色彩感をもつ名曲ばかりです。皆さまにもきっと楽しんでいただけるものと確信しております。

ヒンデミットのヴィオラ協奏曲「白鳥を焼く男」では、新進気鋭のヴィオリスト 山本一輝さんをソリストとしてお迎えしました。ヴィオラの名手としても有名だったヒンデミットは、無伴奏ソナタなどヴィオラ奏者の重要なレパートリーとなっている名曲を数多くのこしておりますが、この協奏曲は小編成オーケストラを伴うユニークな編成で、円熟の書法が光る佳曲です。山本さんのフレッシュな解釈が楽しみでなりません。

それでは、ごゆっくりお聴きください。



水星交響楽団 運営委員長 植松 隆治

水星交響楽団

水星交響楽団は、1984年に一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成されたアマチュア・オーケストラである。都内の主要ホール等で、定期演奏会を年2回行い、マーラー、バルトーク、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ホルストなど大編成の曲に積極的に取り組んでいる。楽団の名前の由来は、一橋大学のシンボルである「マーキュリー」やセロ弾きのゴーシュの「金星音楽団」から来ている等いろいろ考えられる。

演奏会のアンケートのお願い

演奏会終了後に今回のチェンバーシリーズ演奏会の感想をお聞かせください。右に記載しているURL、もしくはQRコードからアンケートフォームにアクセスしてご記入ください。

PCなどから

スマートフォンなどから

bit.ly/3ix6Lra



※演奏中は携帯電話、スマートフォンの電源 OFF のご協力をお願いしております。上記は、休憩中、演奏会終了後にご記入ください。

指揮者紹介

齊藤 栄一



京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981年には京都大学交響楽団と2週間に渡り、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮。82年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」（関西初演）の副指揮者を務める。

84年に水星交響楽団の常任指揮者に就任。水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共催で、佐多達枝振り付けのバレエ「カルミナ・ブラーナ」（95年、東京文化会館）、「ダフニスとクロエ」（99年、新宿文化センター）を指揮した。その後、「カルミナ・ブラーナ」のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮している。2005年には、同曲を含むオルフの「トリオンフィ」3部作（4台のピアノと打楽器）を指揮している。

明治学院大学文学部芸術学科教授。著書に「往還する視線 14 - 17世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学」（近代文芸社）、「振っても書いてもしょせん酔狂」（水響興満新報社）がある。

ソリスト紹介

山本 一輝



5歳よりヴァイオリンを始め、18歳よりヴィオラに転向。クアルテット・インテグラのメンバーとして第8回秋吉台音楽コンクール弦楽四重奏部門 第1位。併せて、ベートーヴェン賞、山口県知事賞を受賞。キジアーナ音楽院夏期マスタークラスにてクライブ・グリーンズミス氏に師事し、最も優秀な弦楽四重奏団に贈られる

"Banca Monte dei Paschi di Siena" Prizeを受賞。フィリアホールや札幌コンサートホール Kitara、サントリーホールブルーローズ等、各地で演奏を行うほか、堤剛、山崎伸子、練木繁夫、亀井良信各氏との共演でも好評を博す。ソロでは、横浜交響楽団とのバルトークのヴィオラ協奏曲を共演や、新曲の初演にも意欲的に取り組んでいる。

NHK Eテレ「ららら♪クラシック」に出演。これまでに、ヴィオラを佐々木亮氏に、弦楽四重奏を磯村和英、山崎伸子、原田幸一郎、池田菊衛、花田和加子、堤剛、毛利伯郎、練木繁夫各氏に、ヴァイオリンを木野雅之、森川ちひろ両氏に、作曲を石島正博氏に師事。サントリーホール室内楽アカデミー第5,6期フェロー。公益財団法人松尾学術振興財団より第29回助成を受ける。桐朋女子高等学校音楽科(男女共学)及び桐朋学園大学音楽学部卒業。

山本一輝さんのインタビューは
こちらをご覧ください。

bit.ly/2N9sGsB



※演奏中は携帯電話、スマートフォンの電源 OFF のご協力をお願いしております。
上記インタビューは、休憩中、演奏会終了後にお楽しみください。

楽曲解説

フランス・プーランク フランス組曲

「フランス組曲」を Google や YouTube で検索すると、まずバッハのフランス組曲が出てきて、次にミヨーのそれが表示されるようですが、本日演奏するのはプーランクの（クロード・ジェルヴォーズによる）フランス組曲（Suite française d'après Claude Gervaise）FP.80 です。その特殊な編成からか、残念ながら演奏される機会が少ない曲です。プーランクは 16 世紀のフランスの王妃を題材とした戯曲「マルゴ王妃」の劇音楽を作曲しました。彼はこの戯曲の旋律をマルゴ王妃の時代の作曲家であるクロード・ジェルヴォーズの編纂した舞曲集から採って編曲しましたが、後にこれらの楽曲を組曲として出版したのがこの曲です。

全曲を通して、フランス・ルネッサンスのシンプルで印象的な舞曲のメロディを、近代的なハーモニー、大胆なダイナミクス、特殊な編成に織りなされるカラフルな音色・リズムが彩っており、まさに温故知新のアイデアによる佳曲だと思います。（プーランクは、親交のあったプロコフィエフの追憶のためオーボエソナタを作曲していますが、プロコフィエフが同じようなアイデアで作曲したのが、後ほど演奏する古典交響曲です。）

第 1 曲 ブルゴーニュのブランル [陽気に、しかし急がないで]

短い小太鼓の序奏の後、明るい舞曲を様々な楽器が代わる代わるにぎやかに奏していきます。ブランルは、16 世紀当時のフランスの輪舞で、その語源は「揺れる」を意味する branler とされています。

第 2 曲 パヴァーヌ [荘重に、メランコリックに]

金管楽器による荘重なコラールの後にチェンバロと管楽器が奏でる中間部の響きが印象的な曲です。その後、再び金管楽器が荘重なコラールが奏します。

第 3 曲 小さな軍隊行進曲 [率直に、生き生きと]

一転、小太鼓を合図に快活に奏せられる明るい行進曲です。

第 4 曲 コンプラント(哀歌) [静かに、そしてメランコリックに]

オーボエとチェンバロが呼応するように哀歌を奏します。

第 5 曲 シャンパーニュのブランル [動きを持って、遅くならずに]

第 1 曲と同じくブランルですが、素朴なメロディの中にも前曲の余韻を感じます。

第 6 曲 シシリエンヌ [とても優しく]

まるで夢を見ているような温かいハ長調の旋律を、優しく美しい響きが包みます。

第 7 曲 カリヨン(鐘) [とても速く]

1 曲目と同じように、楽しげに鐘を鳴らすようなメロディを様々な楽器で奏されます。5 拍子ばかりたり、3 拍子ばかりたり、とにかく楽しくにぎやかに進行しますが、第 1 曲目の小太鼓の序奏を合図に、終曲に向かいます。

(浅田 健二)

パウル・ヒンデミット ヴィオラ協奏曲「白鳥を焼く男」

「白鳥を焼く男」、初めて聞いた人にとってはなんとも衝撃的なタイトルだが、ヴィオラ界ではバルトーク、ウォルトンと並ぶ 3 大ヴィオラ協奏曲の一つで、決して欠かすことのできない超重要なレパートリーである。また私個人にとってはバルトークのヴィオラ協奏曲とこの「白鳥を焼く男」は 2 大ヴィオリストとしての血が騒ぐ曲で、聴いているだけでもウズウズしてしまう。

パウル・ヒンデミット (1895-1963) は我々ヴィオリストにとっては神様のような存在だ。ヴィオラという楽器の歴史は彼以前と以後で分かれると言っても過言ではない。なぜなら今日のようにヴィオラがソロ楽器として認められているのは、彼のおかげからだ。ヒンデミットはまず作曲家として数多くのヴィオラソロの作品を残してくれた。またヴィオリストとしてもヴィオラという楽器の可能性を世の中に知らしめてくれたのではないかと思う。ヒンデミットの自作自演の録音はいくつか残されており、その独特な音程感と弾き飛ばしっぷりからしばしば議論の対象となるのだが、私はここで断言したい。ヒンデミットは間違いなく素晴らしいヴィオリストであると。彼の演奏にはなんとも言えない凄まじさがある。

ところで、ヴィオラという楽器は意外にもヒンデミットよりずっと前から多くの作曲家達に愛されてきた。ドヴォルザークがヴィオリストであったことは有名な話だが、実はバッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトもヴィオリストであったようだ。どうりで彼らの室内楽作品ではヴィオラが最も重要である。すなわちヴィオラが地味な存在だった時代なんてそもそも存在しない。それどころか、これだけの大作作曲家達から愛されてきたのだから、ヴィオラがいかに魅力的な楽器であるかがよくお分かりいただけることだろう。しかしながらヴィオラをソロ楽器として扱った作品はなぜかヒンデミット以前のはあまり残されなかった。

さて、そろそろ本題に入らなければいけないのだが、曲についてはあまり余計な情報で先入観を持たないように、ごく簡単に書かせていただきたい。まずこの曲のタイトルは、第 3 楽章のテーマで使われているドイツ民謡「あなたは白鳥を焼く人ではありませんね？」からつけられた。第 1、2 楽章でもそれぞれドイツ民謡が使用されており、そのタイトルが付けられている。第 1 楽章「山と深い峡谷の間で」、第 2 楽章「いざその葉を落とせ、小さな菩提樹」、そして第 3 楽章「白鳥を焼く男」。第 2 楽章の中間部では、「垣の上にカッコウが止まり」をテーマに見事なフーガが書かれており、これはフーガの名手であった作曲家ヒンデミットの真骨頂だ。オーケストラの編成は小さく、なんと弦楽器はチェロとコントラバスだけ。協奏曲とはいってもかなり室内楽的な要素を含んでいる。その中でソリストは吟遊詩人として登場する。以上。あとはお客様のそれぞれの感性に委ねたいと思う。それではお楽しみ下さい！

(山本 一輝)

セルゲイ・プロコフィエフ 交響曲第1番「古典交響曲」

セルゲイ・プロコフィエフ（1891~1953）はロシア帝国南部（現ウクライナ）の小さな村に生まれました。彼は5歳で作曲を始め、13歳でペテルブルグ音楽院に入学するなど、若くしてその類い稀なる才能を発揮します。26歳の時、彼自身の初めての交響曲として作曲されたのが、今回演奏する交響曲第1番「古典」です。

この作品が初演されるや否や、彼は自由な音楽活動の場を求め、ロシア革命が勃発した祖国を離れ、アメリカとフランスを拠点として作曲活動に勤しむようになります。しかし次第に望郷の思いが募ると、ソビエト連邦となった祖国へ戻り、終生ソビエト連邦の作曲家として生きる道を選びます。そして、著名な「ピーターと狼」（1936）、「交響曲第5番」（1945）、などの作品を発表した後、奇しくも時の指導者スターリンが亡くなった、その同年同日にその生涯を終えるのです。

この作品は、プロコフィエフ自身が「ハイドンが今でも生きていたらこのように書いたであろう」と証言している通り、古典的な「明朗さ」、「軽快さ」がベースにある一方、聴く者に新鮮な印象を与える、現代的な「色鮮やかさ」も持ち合わせています。大作として評価される後期の作品とは編成や曲の主題といった点で明らかに異なるものの、いわば「当時の」クラシック音楽を現代的に作り上げてしまったという、その野心的な側面が垣間見られる点から、若きプロコフィエフとしての「大作」と言って差し支えないかもしれません。

第1楽章：アレグロ

冒頭から澁澁とした第1主題が登場します。軽妙な第2主題の後、展開部となりますが、予想外の転調や、主題の大胆な拡張がプロコフィエフらしさを表していると言えます。

第2楽章：ラルゲット

ヴァイオリンによる澄み切った旋律が魅力的な楽章です。中間部ではファゴットと低弦がスタッカートで主題を奏します。

第3楽章：ガヴォット

非常に短いですが、古典らしい舞踏的な雰囲気と、現代的でユーモラスな雰囲気が見事に融合した楽章です。

第4楽章：モルト・ヴィヴァーチェ

急速で活気に満ちた終曲です。軽快な主題は絶えず細かな動きを伴うため、特に木管楽器奏者にとっては指折りの難曲として紹介されることもあります。活気に満ちた雰囲気のまま、爽快に全曲を閉じます。

(大山 司)

芥川 也寸志 弦楽のための三楽章

芥川也寸志（1925~1989）が28歳の時に作曲したこの曲は、22歳の時に作曲した「交響三章」、25歳の時の「交響管絃楽のための音楽」と並んで、彼の作曲初期における三大作品のひとつとして知られているが、曲の完成度としては一番とも言われている。今回、この曲を取り上げた理由は、曲のすばらしさは勿論のことだが、編成が弦楽器（コントラバス含む）のみであること、そして演奏時間がたった約14分ということが最も魅力的だったからである。大曲好きの水響だが、今回は諸事情によりチェンバーコンサート、つまり室内楽演奏会と銘打っており、「チェンバーとは屋外でしかできない曲以外なら何をやってもOK」と思っている人種が多い当団体の中で、弦楽器（コントラバス含む）のみのこの曲をねじ込むにはうってつけの曲の長さだったのである。結果、選曲会議も「弦だけだし、短いからいいんじゃないかね」という意味不明な理由で無事通過、本日に至るといふ流れである。

曲紹介に戻るが、この曲は1953年当時 NHK 交響楽団の常任指揮者であったクルト・ヴェスの委嘱によって作曲されたもので、同年12月にカーネギーホールにてヴェス指揮、ニューヨーク・フィルハーモニックで初演された。曲名は芥川のア聴曲のひとつであったアレクサンデル・タンスマン（1897~1986、ポーランドの作曲家）の「トリプティーク」にちなんで名付けられた。曲は3楽章制で「急（アレグロ）— 緩（アンダンテ）— 急（プレスト）」という構成で、「交響三章」と同じである。この曲の第3楽章については「江戸の祭囃子のリズムにヒントを得た」と芥川本人は言っていたそうであるが、第1楽章も強烈に打ち鳴らす和太鼓演奏のような迫力・リズム感があり、第2楽章での「Knock the body」という楽器の胴体を拳で叩く珍しい奏法も、和太鼓の棒打ちをイメージさせる。アメリカでの初演を意識して全体的に「日本の和太鼓」をモチーフにしたのではないかとされている。西洋音楽のテクニクを使って、日本人にしか書けない音楽をたった14分に凝縮させているところが、この曲の完成度の高さを示し、若き芥川也寸志の傑作と言われている所以なのだろう。

ちなみに、楽譜が出版されたのは1956年であるが、出版元はソ連の国立出版局である。芥川はこの曲の作曲の翌年1954年に当時国交が無かったソ連へ密入国。以前から彼はソビエト音楽会の圧倒的な充実ぶりに魅了されており、ひそかに密入国の計画を立てていた。籐で編まれた買物カゴに前出の三大作品のスコアとパート譜を入れて、ウィーン、ハンガリー、ちょこっと中国を経由して、モスクワへ。モスクワ滞在中にはソ連の指揮者によってこの曲も演奏され、ショスタコービッチやハチャトゥリアン、カバレフスキーらとも親交を深めた。そのような縁もあり、ソ連国立出版局からこの曲が出版される運びとなった。第二次大戦後、ソ連で楽譜が出版された外国人作曲家としては ガーシュウィン、ブリテン、ニールセンに続く4人目という特別待遇であった。

(Cb 世話役)



パウル・ヒンデミット

ピアノ、金管と2台のハープのための協奏音楽

ドイツの作曲家パウル・ヒンデミット（1895~1963）は作曲だけではなく、演奏家（ヴァイオリン、ヴィオラの名手でした）・指揮者・教育者として多大な功績を残しましたが、その作曲技法からみると3つの時期に様式区分できます。対位法的書法が特徴的な第1期（1923年頃まで、代表作「弦楽四重奏曲第1・2番」等）、「新即物主義」と称された様式を確立した第2期（1934年頃まで、代表作 交響曲「画家マティス」等）、調性を基盤とし新古典の様式に進んだ第3期です。

第3期において彼は管弦楽を構成するほとんど全ての楽器によるソナタ・協奏曲を作っていますが、今回演奏される作品は、第2期に集中して書かれた「室内音楽」（Kammermusik：小編成オーケストラとピアノ・ヴァイオリンなどの独奏楽器による協奏曲群）から、第3期のソナタ群、特に、ほとんど全ての金管楽器とピアノによるソナタ群へのブリッジ的な存在と考えられます。

ところで、この曲と同じ時期に書かれた「弦楽と金管による協奏音楽」（作品50、作曲も1930年と同じ）に比べ、この曲は極めて演奏頻度が少なく、Wikipediaの主な作品リストにも出ておりません。作品50が、その後書かれた管弦楽作品の名作「画家マティス」「気高き幻想」「ウェーバーの主題による協奏的変容」などの先駆けと考えられる一方で、作品49のこの曲から、あのソナタ群が産まれたことを考えれば、もっと演奏頻度が高くてよいのでは強く思ってしまう。編成的には、オーケストラではとりあげにくいし、金管アンサンブルの演奏会でも、ピアノと2台のハープがネックとなるのかもしれませんが、それではあまりにも勿体ない。今回のチェンバー演奏会が決まったとき、私のアタマに浮かんだのはまさにこの曲だったのです。

第1楽章：Ruhig gehende Viertel, Lebhaft

チューバによるゆったりした物憂げな旋律をピアノが受け継ぎ、金管全体の合奏に発展。ピアノと2台のハープによる間奏を経て、静かに消えていきますが、突如、ピアノが激しい主題を奏で、ヒンデミットの十八番であるフーガが始まります。金管のフォルテ3つの強奏がそれをささげり、金管に主題が移りますが、ミュートによる音色の変化など多彩な変容を経て、最後はファンファーレで終わります。

第2楽章：Sehr ruhig, Variationen

ピアノとハープだけの楽章。ピアノによる主題が変奏曲の形式で自由に発展し、ハープが絡んで幻想的な世界を形成します。

第3楽章：Mäßig schnell, kraftvoll

再び金管全体による力強い主題提示。ピアノがそれに加わって飛翔します。中間部にはホルンとチューバによるコラー風の新たな主題によって少し落ち着きを見せますが、再度、冒頭主題が回帰。フォルテシモからのクレッシェンドで曲が途切れます（このあたりは「弦楽と金管」との共通性が色濃く思えます）。第1楽章冒頭の雰囲気に戻り、ピアノの消えゆくようなカデンツを経て、温かな長調の和音で曲を閉じます。

（いいんちょう@演奏はサミットプラスもいいけどフィリップ・ジョーンズの方が好み）

エイトル・ヴィラ＝ロボス ブラジル風バツハ第2番

ブラジルにはサウダージ（Saudade）という言葉があるそうです。いまはもう遠ざかってしまったうれしかったことを思い出す心持ちというような翻訳者泣かせの言葉だそうです。よく晴れた海岸で友人たちと楽しい時間を過ごし、やがて夕暮れがおとずれたときの嬉しいような悲しいような気持ちだと聞いたことがあります。誰に聞いたんだっただかな～。～中略～

みなさまご存じの通り、南米には優れた第2番を作曲する伝統があります。3大南米2番といえますと、本日の「ブラジル風バツハ第2番」を筆頭として、メキシコ第2の国歌と呼ばれるマルケス作曲の「ダンソン第2番」、南米クラシック音楽の父と呼ばれたカルロス・チャベスの「交響曲第2番」ということになりましょう。～中略～

本日の「ブラジル風バツハ第2番」はそのブラジルはリオ・デ・ジャネイロに生まれた大作曲家、ヴィラ＝ロボスの代表作のひとつです。原題は「Bachianas Brasileiras N.2」。BachianasもBrasileirasもどちらも形容詞で、意味合いとしては「ブラジル風なバツハ」ということでもなく、「バツハ風な、ブラジル風な」に近いようです。最近では原題の通り、「バッキアーナス・ブラジレイラス」と書いてあることも多いですね。作曲は1933年。サクスのある1管編成を基本にトランペットはなし、ホルンが2本、チェレスタ、ピアノ、打楽器と弦5部となっております。くーっ、たまりませんね。曲は4つの楽章からなり、各楽章にはバツハ風のタイトルとブラジル風のタイトルが併記されています。

第1楽章： Preludio: O Canto do Capadocio 「前奏曲／ならず者の唄」

第2楽章： Aria: O Canto da Nossa Terra 「アリア／祖国の唄」

第3楽章： Danca: Lembranca do Sertao 「舞曲／藪の思い出」

第4楽章： Tocata: O Trenzinho do Caipira 「トッカータ／カイピラの小さな汽車」

これをみるとバツハの様式にブラジルの唄を融合したようなイメージかもしれません。どこをとっても唄える切ないメロディが多声で重ねられていきます。何ともたまらない響きですね。第1楽章は「前奏曲／ならず者の唄」、冒頭からゆっくりとした重苦しい響きで満たされたなかからテナーサクスの歌が浮かび上がります。グリッサンドや3連符が多用された自由な節回しは、まさに片田舎のならず者という雰囲気です。飲んでる感じですね。魅惑のメロディはテナーサクス、チェロ、トロンボーン、ファゴットなど中低音の魅力あふれるみなさんが担当してまいります。この辺りはヴィラ＝ロボスの趣味なのでしょう。しばらく浸っていますと中間部では快調なテンポで軽やかなブラジル風のリズム！いいですね。そして再び冒頭の重苦しい哀愁のならず者の唄がかえってきて酔いつぶれるかのように静かに終わります。第2楽章は「アリア／祖国の唄」、衝撃的なフルオーケストラの9thコードではじまり、チェロがソロで唄い始めます。なにかを思い出すかのような切なくも息の長いメロディです。そして「行進曲風のテンポで」と書かれた楽しい中間部、快調ですが不規則なアクセントが入ります。でこぼこした田舎道でしょうか？ひとしきり楽しめると再び衝撃の冒頭がかえってまいります。クーっ、しびれますね。そして切ないメロディを今度はヴァイオリンとチェロが奏でます。最後は我に返るかのようなトロンボーン。第3楽章は「舞曲／藪の思い出」、藪の思い出って

なんのことでしょうか... 吹き渡る草原の風のような快調なピチカートに乗って誰かに呼びかけるようなトロンボーンソロです。素晴らしいですね！中間部ではさらに激しく風が舞い踊るようです。まさに舞曲！やがて静まっていきますが、最後には青春の雄叫びが響き渡ります。さて第4楽章「トッカータ／カイッピラの小さな汽車」は、ヴィラ＝ロボスのもっともポピュラーなオケ曲とも言われる名曲です。停車していた汽車がガタゴトと動き出してやがて快調なスピードに乗ります。鼻歌のような楽しいメロディ、快調な車窓、ときどきガタゴトする異音、汽笛や掛け声、そしてだんだん速度が下がって停車するかのような素敵な曲です。これはやっぱり蒸気機関車でしょうか。シベリウスの「フィンランディア」やドヴォルザークの「新世界」、オネゲルの「パシフィック231」など産業革命をもたらした蒸気機関と鉄道にインスパイアされた名曲は数知れませんね。聴衆を求めて世界を旅する音楽家と、重い車両を牽引するダイナミズムにはなにか引き合うものがあるに違いありません。～中略～

ヴィラ＝ロボスのメロディは、どんなに快調な場面でもどこかに物寂しさが感じられる気がいたします。日本からは地球を挟んだ反対側にある国、ブラジル。本日はそんなブラジルの方が大切に思うサウダージ感をみなさまと味わえたら最高でございます。面白うてやがてかなしき... なかなか遠出がむずかしい世の中となりましたが、気持ちだけでも羽ばたきたいものでございます。

(山本 勲)

この曲紹介の全文はこちら

bit.ly/3qCT7W9



※演奏中は携帯電話、スマートフォンの電源 OFF のご協力をお願いしております。上記は、休憩中、演奏会終了後にお楽しみください。

水星交響楽団

常任指揮者

齊藤 栄一

コンサートマスター

米嶋 龍昌

ファーストヴァイオリン

伊東 陽子

大岩 淳子

川原 ひかり

鈴木 牧

田代 新

永井 翠

西沢 洋

森 勇人

◎米嶋 龍昌

セカンドヴァイオリン

石川 貴隆

織井 奈津乃

櫻田 雅信

◎砂川 湧

高橋 熙

滝沢 蘭

土屋 和隆

ヴィオラ

井上 拓

◎古宇田 凱

成田 秀之

錦見 容代

三上 さやか

山口 実

チェロ

北岡 正英

◎首藤 ひかり

鈴木 皇太郎

橋 温子

能岡 雅人

コントラバス

◎石附 鈴之介

刈田 淳司

壽川 賢太

野村 美里

フルート

今城 琴美

◎大山 司

福永 勇希

オーボエ

秋葉 晴香

菅野 勇斗

◎齋藤 暁彦

寺田 吉太郎

クラリネット

市村 広奈

清水 樹土

◎藤原 誠明

テナー・バリトンサクソ

中野 明

ファゴット

伊藤 綾香

金谷 蔵人

◎富井 一夫

ホルン

伊集院 正宗

大高 直哉

◎島 啓

山崎 智哉

トランペット

◎岩瀬 世彦

神山 優美

戸辺 悠大

トロンボーン

石井 志歩

小林 威之

◎佐藤 幸宏

チューバ

植松 隆治

パーカッション

安西 理玖

奥山 千穂

鈴木 日向子

高橋 淳

高良 佑佳

◎椿 康太郎

茂木 沙織

山本 勲

ハーブ

東森 真紀子

矢澤 みさ子

ピアノ

山形 リサ

チェンバロ・チェレスタ

齋藤 豊

◎=パートリーダー

今回お世話になったトレーナーの先生 山田 裕治

水星交響楽団運営委員会

運営委員長：植松 隆治

コンサートマスター：米嶋 龍昌

弦インスペクター：刈田 淳司、川俣 英男

木管インスペクター：横地 篤志

金管インスペクター：佐藤 幸宏

打楽器インスペクター：山本 勲

楽譜：伊集院 正宗、野口 秀樹、宮川 雅裕

ステージ・マネージャー：櫻井 統

会計：浅田 健二、黒川 夏実

運搬：刈田 淳司

広報・受付：岡本 真哉、土屋 和隆、東海林 拓人

プログラム：伊集院 正宗

チケット：古宇田 凱、砂川 湧

チラシデザイン：山崎 未来

次回演奏会のご案内

水星交響楽団 第61回定期演奏会

指揮 齊藤 栄一

2021年5月23日(日) 13:00 開場 13:30 開演(予定)

すみだトリフォニーホール 大ホール

— 齊藤 栄一セレクションプログラム —

ブリテン 青少年のための管弦楽入門

ブルックナー 交響曲第5番